

フレッシュトーク

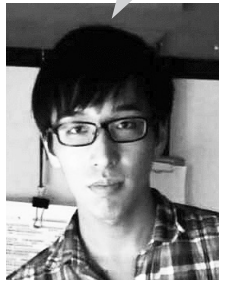
上京し、エネルギーに新生活を謳歌する若者たちが「いま」を語る。

信陽舎での暮らし

神藤駿介 (高67回)

明治大学政治経済学部地域行政学科3年

●じんどう・しゅんすけ
高森町出身。飯田高校では野球部に所属。進学後は主に教育行政や都市政策を学ぶ。現在は東京六大学野球ゼミナールに所属。趣味は読書、スポーツ観戦、食べ歩きなど。好きな言葉は「去華就実」。



飯田高校を卒業してから早3年。右も左もわからぬまま上京し、人の多さや高層ビル群に圧倒された少年も気がついたら20歳を迎え、いわゆる大人の仲間入りを果たしてしまった。大学3年生となり、すっかり東京に順応したと言いたいところだが、いまだに満員電車で慣れることができず、ひとり自転車での移動を続けている。

私は上京して以来、信陽舎学生寮で生活している。玉川上水のほとり、自然豊かな武蔵野の閑静な住宅街に位置する信陽舎は、長野県出身の男子学生が集う学生寮である。樹齢200年を超える楠の巨木がすぐ近く

できる貴重な時間である。しかし、大学生は自分が好む情報以外を遮断しがちである。ある学生生活実態調査によれば大学生の約半数は読書の習慣がない。大学の講義も興味のあるものしか受講しないし、テレビも録画したのしか見ないという人が少なくない。新聞やニュースはスマホで見ると、興味のないものは目に入らないということも多い。また、高校時代からの友人や、サークルなどで知り合った気の合う仲間といつも一緒に行動しており、同じような価値観を持つ人間としか接する機会がないという人も少なからずいる。興味のある分野に対する知識を深めることの重要性を否定するつもりはないが、私は大学生が限られた情報、人にしか触れないことは非常にもったいないと感じる。

その点、信陽舎で暮らすことで得られるものは多い。信陽舎で共に生活する寮生は皆、長野県出身ではあるものの出身地域は様々であり、出身高校、進学先、学部、専攻もそれぞれ違う。体育会の部活動に打ち込む者や、就職活動・資格試験の勉強に勤しむ者もいる。育ちも違えば、性格も年齢も趣味も専攻も違う26人が生活する信陽舎は「異文化交流の場」であり、小さいながらも立派な社会である。それゆえ、生活を共にする中で互いの違いを尊重し合い、刺激し合いながら人間関係の在り方を

に聳え立ち、その楠を名の由来とする「珈琲館くすの樹」は信陽舎の在寮生行きつけの店となっている。信陽舎の名は「長野県の南信地方の人々が作った学び舎」を意味し、明治39年に東京の大塚台に創立された。以来、東京大空襲をはじめとする様々な困難に直面するも、それを乗り越え現在に至る。110年を超える歴史を持ち、歴代在寮生数は900名に迫ろうとしている。

幾多の変遷を経た後、1996年4月には武蔵野市の高齢者福祉施設・桜堤ケアハウスと合築した。「春秋館」と名付けられた建物は、学生と高齢者がひとつ屋根の下で生活する合築施設となっており、全国的に見ても非常に珍しい学生寮となっている。信陽舎とケアハウスが合同で行う防災訓練や地域祭、年末大掃除などを通じて、寮生はケアハウスの方々と親睦を深めている。信陽舎の寮生は現在26名と他の学生寮と比較して少人数であり、和気藹々とした雰囲気の特徴である。

大学生には様々なチャンスが与えられる。大学図書館に所蔵されているありとあらゆる情報源に触れることを許され、大学内はもちろんアルバイトやボランティア活動、課外実習などにおいて様々な人々と話をするチャンスを与えられる。大学生期間は、あらゆるチャンスから視野を広げ、社会を知り、さらには自分を知ることが学ぶと同時に、社会における自分の役割、存在意義を考えることができる。さらに、信陽舎では、OBの方々やケアハウスの方々からお話を聞く機会もある。人生の先輩方との交流はまさに「異文化交流」であり、視野が広がる。また、信陽舎には資料室があり、多くの本や新聞に触れることができる。未知との出会いが信陽舎にはあふれているのである。

大学生、特に東京の大学生には、無限の可能性がある。東京は何といっても人が多い、大学が多い、企業が多い。アルバイトひとつとっても様々なものがあり、多様な人々が集う。自分を問わずあらゆる人と交流できるのは、東京の大学生の特権である。そんな中、帰宅してもしも刺激にあふれる信陽舎での暮らしは、長いようで短い大学生活を、より色濃いものにしてくれる。



OBやケアハウスの方々をおもてなしする1年に1度の寮祭